

水田
弥生時代研究の歩みから
—趣旨説明・問題提起に代えて—

伊藤淳史（京都大学文化財総合研究センター）

1. はじめに

近畿弥生の会では、これまで、調査や研究の動向に鑑みながら、2度のテーマ討論会（墓制・鉄器化）や企画シンポジウム（集落）を行ってきました。いずれも、調査現場からの基本資料を見直し、確かな事実を大切にしながら、イメージが先行しがちな弥生社会像を検証する意欲的な議論を目指してきたものです。

今回は、水田を対象とします。開催趣旨にもありますように、水田は、弥生社会を支える基本的生業の場であり、農業技術の水準を知ることによって社会の発達度を推し量ろうという研究方向が、ひとつにはあります。しかしながら、その行為は一個人で為し得ないものであり、集団としての関与が求められます。遺構としての水田遺跡から、そうした集団の規模や、性格、集団間の関係といったものも読み取れる可能性があるのではないのでしょうか。その点では、集落や墓制などの研究から目指している集団構造や社会構造の解明と、研究の目的や意義は何ら変わることはなく、むしろ相互に検証し合いながら、総合的な弥生社会像の構築を目指す必要があります。

一方で、水田遺跡の研究は、地形環境や土地条件を解析する地理学、地質学、土壌学など、あるいは栽培技術にかかわる農学や遺伝学など諸分野からもアプローチされる、きわめて学際的な性格のものであります。その多様さゆえに、研究としての最終目標をどこに定めるのか、ともすれば見失う危険があると思われます。したがって今回は、「社会論としての水田研究」という方向性に目標を絞りました。近畿地方では、池島・福万寺遺跡の水田研究に代表されるように、河内平野の低地帯を中心に、堆積環境の精緻な復元に立脚した調査・研究が進められてきたと言えます。そして、その成果を活用した、集団構造や地域社会の変動を把握する議論が、提出されつつあります。これまで主張されてきた集落や墓制の研究にもとづく集団構造や社会組織の復元とも照合しながら、検討や評価をおこなう土俵が整ってきたといえるでしょう。

こうしたなかで、これまで生産域の様相が不明であった大和盆地においても、前期の広大な水田が明らかとなった中西・秋津遺跡など、西南部を中心に事例が報告されつつあります。調査はまだ進行中ではありますが、蓄積されてきた弥生水田の研究のなかで、そして大和の弥生社会において、どのように評価していくべきなのか、考えを提出していく段階にきていると思われます。あわせて、すでに事例そのものは珍しくなくなっているともいえる各地の弥生水田についても、社会論としての水田研究という問題意識に照らして、再検討を試みる必要があるでしょう。

以上のような検討を通じて、多様なアプローチが可能な水田や生産領域といったものにかかわる考古学情報への認識が深まり、有意義な研究方向を考える契機とすること、それを今後のわれわれの日常的な調査・研究の次元において、ひいては弥生時代の研究においても活かしていくこと、これが今回の討論会を設定した最大の目的と意義です。

以上、開催趣旨について補足的な説明をしました。以下では、より具体的な課題を提出すべく、私なりにごく簡単に水田研究の歩みを整理し、討論のための問題提起に代えたいと思います。

2. 弥生水田研究の流れ

主要な水田遺跡の調査年次とともに、水田研究に関連する諸論考を中心に、内容区分と年次で整理しまとめたものをものを掲げます（図1）。

現在私たちが弥生水田の典型として認識しているのは「小区画水田」ですが、その存在がはっきり認識されたのは群馬県日高遺跡の調査と報告（1977～78年）から、となります。それ以前の唯一例が登呂遺跡（1947～48年）ですが、弥生水田の実態に関する認識が大きく転換した、ということで、研究史的にもここ（日高遺跡）で2分するのが妥当と考えます。Ⅰ期：「日高以前」、Ⅱ期：日高以後と区分します。

・Ⅰ期（日高以前）－「見えざる水田」の時代

登呂遺跡の様相を歴史的発展段階の中に位置づけるべく、しかしほかに具体的遺構の資料は乏しく、「あるはずの水田」「見えざる水田」を前提として議論が進められています。ただし、この段階からすでに、現在の水田研究にもつながる2つの主要な方向性－集団や社会構造を追求する方向性と、学際的性格を持った農耕技術史的研究の方向性－が、明瞭に現れていることが確認できます。

前者については、単位集団の想定、すなわち住居5棟＋倉庫程度の集団を経営と消費の基本単位とする前提に、周囲にある（はずの）谷水田の経営が想定される議論に象徴されます〔近藤 1959〕。また、直接集団の構造を論じるものではないが、集団規模の想定に欠かせない水田からの生産力復元という社会経済史的視点の研究〔乙益 1978〕も、この範疇に含めて良いと思います。

後者については、その源流は、立地の変遷が生業変化やその発展段階と関連するという視点の遺跡立地論として、唐古遺跡報告のころより認められてきました〔藤岡 1943・1946〕〔井関 1953〕。そしてそこに、現在の水田や可耕地の土壌環境を類型化し、過去に遡及してそれを類推し比較する研究が現れます〔八賀 1968〕。「見えざる水田」にもとづく議論として限界はあったものの、採用された土壌類型や、湿田・半湿田・乾田といった水田類型は、学際的な知識を援用することの重要性を認識させる端緒となるものでした。

・Ⅱ期（日高以後）－事例の激増と分析の深化

<Ⅱa期－登呂シンポ（1988）まで>

日高遺跡の発見により「小区画水田」の実際が判明して以後、九州～本州北部にかけて水田遺跡例が飛躍的に増加します。実資料にもとづく研究はこの段階からスタートしたといって良いでしょう。そこから現在までの研究動向を概観すると、登呂遺跡発掘40周年を記念して日本考古学協会によるシンポジウムが開催される1988年ごろまでの10年間程度は、新出例の集成と分類・評価に力点が置かれた段階、と言えます。これをⅡa期とします。

そして、そのなかで、かつて「見えざる水田」にもとづいてされていた八賀氏などの水田類型や発達段階の想定が、実例を得ることによって検証・修正されるとともに、具体的な畦畔区画の様相に基づいた分類が提出されるなど〔都出 1983〕、実証的に深化していった段階ともとらえられます。北部九州などでの初期水田についても、立地や土地条件への対応を重視した検討と分類であったといえ、初期からの高い技術力や柔軟性が主張されていきます〔山崎 1988・田崎 1989〕。このように、土地への関わり方の技術的発達段階を読み取ろうという基本姿勢は、農業技術や栽培技術の系譜と進展をもとに弥生社会を考える方向性、そのための水田遺跡研究、という意識をいっそう強めることになったといえます。したがって、集団論や社会論との接点は薄くなっていました。

ただし、生産力の想定という範疇の研究は、継続して試みられていました。また、直接水田遺構か

年次 調査等	社会論・集団論への関与 (社会構造)(集団)(経営形態)(生産力)	折衷・総合	農業技術史重視 (土地条件・立地・環境・栽培技術) (遺構形態)	その他
1947-48 登呂	近藤 1957 近藤 1959		藤岡 1948 井関 1953	
I 1965-66 大中の湖 1968-69 津島 1970 森本			八賀 1968	佐原 1975
1976-77 日高	乙益 1978			
1974-79 服部				
1976- 百間川				
1977-78 板付				
1980 柔畑	寺澤・寺澤 1981			
1979-83 山賀ほか				
1982-83 垂柳				都出 1983
1983- 玉津田中	寺澤 1986			
1984-88 砂沢				
1985- 池島・福万寺			山崎 1987	
1986 津島江道	広瀬 1988	工業 1988 森岡 1988 都出 1989	八賀 1988 田崎 1989	
II a		高谷ほか 1988		
1988 日本考古学協会設立 40 周年記念シンポジウム 『日本における稲作農耕の起源と展開』				
1991 第 30 回埋蔵文化財研究集会 『各地域における米づくりの開始』	安藤 1992	工業 1991	江浦 1991 江浦 1994	広瀬 1998
II b				若林 2001
1997-03 登呂再調査	井上 2002 藤原 2002	森岡 2004	井上 1994	
	秋山 2007		田崎 2002 斎野 2005 廣瀬 2007	
II c		安藤 2009 設楽 2009		
2009- 秋津・中西	大庭 2013 大庭 2014		井上 2011 江浦 2012 佐藤 2013 江浦 2014	
	廣瀬 2015			

図 1 弥生時代水田研究のあゆみ・関連文献の年次と分類（文献名は参考文献に記載）

らの指摘ではないものの、水口や堰・河川の水利レベルと集団の関係についての想定が提出されています〔広瀬 1988〕。これは、広域での調査成果が発表されてくる次の段階以降に、水田研究とリンクして大きな影響を与えていく視点となります。

<Ⅱ b 期－2000 年代はじめ頃まで>

その後、90 年代から 2000 年代はじめころにかけては、上記したような広域調査、とくに池島・福万寺遺跡の成果に立脚した詳細な遺構分類や学際的な検討結果などが公表されていくとともに、後半期にはその成果を活かした水田経営の視点からの検討も発表されはじめます。具体的には、江浦洋氏による弥生後期水田面を中心とした水利や水田ブロックの復元、畦畔接合方法の分類がまず挙げられるでしょう〔江浦 1991・1994〕。そして、この江浦氏の復元と、さきに挙げた広瀬氏の 3 レベルの集団関係とを関連づけて、「ブロック」「ユニット」「ゾーン」という重層的な水田構成の確立を指摘し、後期段階の水田経営の変化として評価する見解が提出されることになります〔井上 2002〕。

ここで明確に打ち出された、地形条件や技術段階だけでなく耕作集団との関わりの観点からも水田跡を研究すべき、という方向性は、「見えざる水田」の段階以後に忘却されがちであった水田研究と集団論との接点をよみがえらせる重要さをもつものと評価されます。また、同時にそれは、「弥生大形環濠集落都市論」〔例えば、広瀬 1998〕や「基礎集団論」〔若林 2001〕といった、弥生集落の実像の検証や、集落－集団関係の再考、集団構造や単位集団論の見直しなどの議論とも並行して提出され、弥生社会の研究動向とも連動するものであった、とも言えます。

<Ⅱ c 期－現在まで>

上記したような 2000 年代前半頃を画期として、背景にある集団や社会を意識した水田研究の方向性が、再び重みを増して現在に至っている、と考えます。近畿地方では、池島・福万寺遺跡の調査が終息する一方で、秋津・中西遺跡の発見があるなど、情報の増加は止まっていないと言えます。そうした状況下で、集落論においても、地形変遷の過程や空間利用の状況を悉皆的な情報収集によって精緻に復元し、その成果を前提に議論を展開するスタイルが基本になってきていると思われます。地質考古学的な練度を高めることによって、より実証性を担保した研究が求められている、ということでしょう。これは、水田研究にとっては伝統的で当然な意識であり、土地条件や環境に焦点をあてる農業技術史的な方向性と十分な親和性があるものですが、集団や社会構造の議論に直接は役立てにくいと言えるかも知れません。しかしながら現在は、積極的にその活用に取り組んだ成果があらわれつつあります。

大庭重信氏は、井上氏の段階では水田遺構の単位と集団規模との関係にとどまっていたものに、水路の配置や水利系統の分類を関連づけた水田モデルを設定し、具体例で検証しています〔大庭 2013〕。これにより、水田の経営主体である集団の単位や集団間の関係を図式化することに成功していますが、作業の前提には、水田遺跡の土地条件と水利系統の細密な復元があります。また、この成果もふまえて、河内平野南部の小地域において、弥生時代における微地形と土地条件の変遷と集落や生産域の動態との関連を復元し、生産量の復元算出も加味しながら、集住や分散という後期までの集落形態の変化が、農業生産や土地利用と密接に関連すること、要因としての環境変動（その結果としての地形変化）を示唆しています〔大庭 2014〕。地域社会、ひいては弥生時代の変容とその背景について、水田や生産領域の検討に軸足を置きながら総合的実証的に明らかにするひとつのスタイルが示されている、と思われます。

3. 今後の課題

以上、雑駁ですが水田にかかわる研究の流れを整理してみました。近年の詳細については、それぞ

れの当事者からの発表でも深く語られると思いますが、現状として、学際的で実証性の高い調査成果にもとづいた集団論や地域社会論が提出されてきている、という認識に至りました。ひろく水田研究という点でみれば、これまで触れてきませんでしたが、社会論とのかかわりという方向性以外の部分でも、問うべき課題は数多くあります。すべてを討論の場で処理しきれものではなく、焦点が異なるものもありますが、最後にそれらも含めて、私なりに課題と思われる点を列挙して、稿を閉じます。

1：系譜の問題

系譜については、小区画水田としての系譜という見方もあれば、水稻耕作そのものの伝播と展開、という追究もあるでしょう。また、近畿地方における現況から、はたして当初から完成した状態の小区画水田が採用されたと見るべきなのかどうか。その技術の系譜は、社会構造としてもセットとして考え得るのかどうか、等々。なお、研究史的には類型としての大区画水田もあり、河姆渡遺跡なども引き合いに出されていました〔都出 1983〕。

2：地域差・時期差の問題

上記の系譜の問題と関連する部分もありますが、列島内の弥生水田について、とくに九州地方の初期水田と近畿地方前期の小区画畦畔を備えた水田との違いを、どう考えるべきなのか。また、近畿地方内では、どうなのか。

時期差という点では、弥生時代という時間幅でみれば、後期段階に水利システムとしても完成された広域の小区画水田が展開する、という評価とともに、前期段階の広域水田の存在も知られている。これらはどう評価されるのだろうか。これは下記の3の問題とも関連するでしょう。

3：水田からみた集団構造と集落からみた集団構造

基本的な集団規模を想定する根拠として、水田からの人口保持力の想定があり、例えば池島・福万寺遺跡後期水田面で158人という数値が提出されています〔廣瀬 2015〕。メジャーフードとしての比重をどの程度見積もるのかという問題はありますが、内部が細分されることを考慮すると、基本となる集団の単位はさらに少人数と考えなければなりません。集落居住域や墓域から復元される集団規模や集団構造と、水田の基本的な経営単位は、はたして関連づけられるのでしょうか。近年の集団論との照合や検証をおこなう必要があると思われます。

中期段階における大規模集落の集住と、後期段階の解体・水田の大規模広域化という動向を、水田経営の管理レベルの違いとする理解があります〔秋山 2007 pp.677-698〕。古河内湖南岸においても、地形環境の変遷で裏付けされながら、後期における集落形態の変化が農業生産と関連すると、指摘されています〔大庭 2014〕。これらが、近畿地方全域、さらには列島の弥生時代の社会構造として、どの程度普遍化できるか、各地域での比較検討が求められると考えます。

4：「3点セット」は幻想か

上記3の課題は、弥生時代集落の古典的な基本モデルとも言えるような、集落・墓・生産域（水田など）の組み合った景観が、はたして存在したのか、という問いに結びつきます。もちろん、空間的な尺度をどの範囲まで広げるかによっても、理解が異なります。集団が生きていく上での生産領域は必要ですから。ただし、一般にイメージするような、互いに隣接しあってこれらが位置して広義の「集落」を構成している姿が、描けるのだろうか。あるいはそれは、時期によっても変化しているのではないか。先入観にとらわれず、検証するべきと思われます。

5：以上を考えるための情報標準の問題

水田研究にとっては、さきに述べたように、土地条件や地形環境の変遷についての理解をふまえた

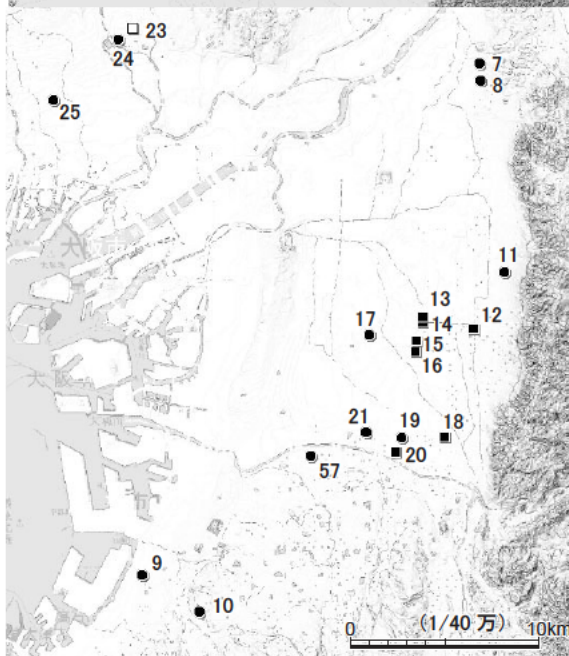
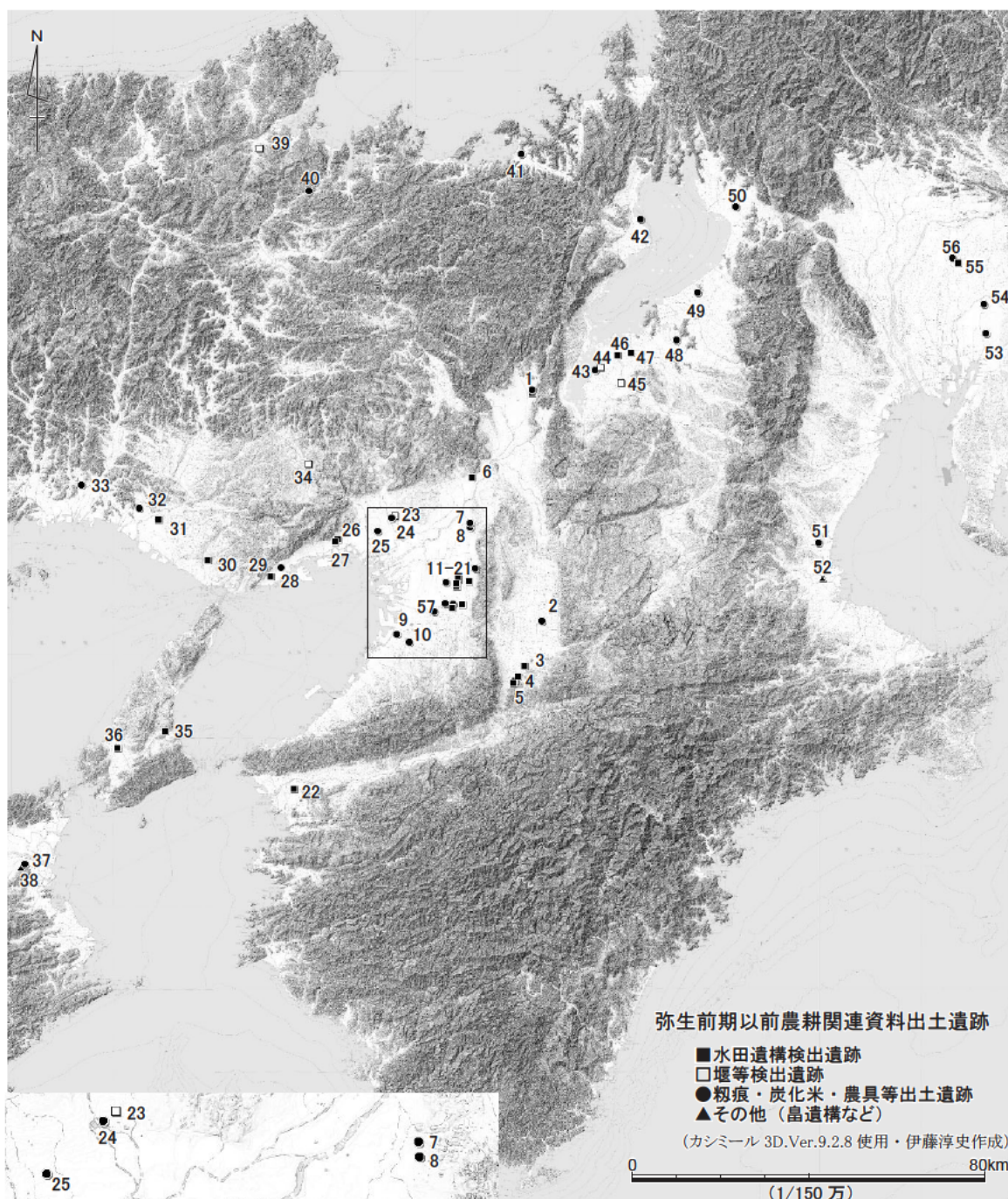
議論が前提となっており、層序や堆積の認識や鑑識眼の重要性が、いっそう増しているといえます。遺跡情報の提出には非常に多くがかかわる現状において、比較検討の水準を整え、実証としての基盤を固めた上での社会構造の議論を展開していくためには、水田や生産領域の研究にとって必要な情報水準について、共通の認識が得られるのが理想と思われます。もっともこれは、水田研究に特化したことではありませんが。テーマ討論会が果たすような役割ではありませんが、議論を通じてそうした認識が醸成される機会になることも、期待されます。

<参考文献>

【参考文献】

- 藤岡謙二郎 1943 「第二章 遺跡地の地理と地形」末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』（京都帝国大学文学部考古学研究報告第16冊）
- 藤岡謙二郎 1946 『地理と古代文化』（古文化叢刊5）大八洲出版
- 井関弘太郎 1953 「日本の初期農業村落の立地に関する若干の問題」『名古屋大学文学部研究論集』V（史学・2）
- 近藤義郎 1957 「弥生水稲農業の技術的達成について」『私たちの考古学』第4巻3号
- 近藤義郎 1959 「共同体と単位集団」『私たちの考古学』第6巻1号
- 八賀 晋 1968 「古代における水田開発—その土壌的環境—」『日本史研究』第96号
- 乙益重隆 1978 「弥生農業の生産力と労働力」『考古学研究』第25巻2号
- 佐原 眞 1975 「農業の開始と階級社会の形成」『岩波講座日本歴史1 原始および古代1』
- 寺澤 薫・寺澤知子 1981 「弥生時代植物質食料の基礎的研究—初期農耕社会の前提として」『橿原考古学研究所紀要 考古学論攷第5冊』
- 都出比呂志 1983 「古代水田の二つの型」『展望・アジアの考古学—樋口隆康教授退官記念論集』（〔都出1989〕pp.43-60に再録）
- 寺澤 薫 1986 「稲作技術と弥生の農業」『日本の古代』第4巻縄文・弥生の生活、中央公論社
- 山崎純男 1987 「北部九州における初期水田—開田地の選択と水田構造の検討—」『九州文化史研究所紀要』32号
- 工楽善通 1988 「2. 水田と畑」『弥生文化の研究』2・生業、雄山閣
- 高谷好一ほか 1988 『古代稲作農耕の学際的研究』（科学研究費補助金総合研究A 成果報告・水田遺構集成）
- 八賀 晋 1988 「1. 水田土壌と立地」『弥生文化の研究』2・生業、雄山閣
- 広瀬和雄 1988 「3. 堰と水路」『弥生文化の研究』2・生業、雄山閣
- 森岡秀人 1988 「近畿地方における稲作農耕の起源と展開」『日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—』（日本考古学協会設立40周年記念シンポジウム）
- 田崎博之 1989 「地形と土と水田」『古代史復元』4・弥生農村の誕生、講談社
- 都出比呂志 1989 『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
- 江浦 洋 1991 「弥生時代水田の総合的理解のための基礎作業I」『大阪文化財研究』第2号
- 工楽善通 1991 『水田の考古学』（UP 考古学選書12）、東京大学出版会
- 安藤広道 1992 「弥生時代水田の立地と面積—横浜市鶴見川・早渕川流域の弥生時代中期集落群からの試算」『史学』第62巻1・2号
- 井上智博 1994 「池島・福万寺遺跡における水稲農耕のはじまり—水稲農耕の定着過程を考えるために基礎研究1—」『大阪文化財研究』第4号

- 江浦 洋 1994 「小区画水田造成技術の変革—六角形小区画水田の提唱」『文化財学論集』
- 広瀬和雄 1998 「弥生都市の成立」『考古学研究』第45巻3号
- 若林邦彦 2001 「弥生時代大規模集落の評価」『日本考古学』第12号
- 井上智博 2002 「弥生時代における水田開発・経営の動態」『池島・福万寺遺跡2』分析・考察編（（財）大阪府文化財センター調査報告書第79集）
- 藤原 哲 2002 「弥生集落の農業経済力」『考古学研究』第49巻3号
- 田崎博之 2002 「日本列島の水田稲作—紀元前1千年紀からの検討—」『東アジアと日本の考古学』Ⅳ・生業、同成社
- 森岡秀人 2004 「前田遺跡弥生前期水田跡をめぐる二、三の問題」『前田遺跡（第20地点）発掘調査概要報告書—弥生前期水田跡の構造と水利動態—』（芦屋市文化財調査報告第52集）
- 斎野裕彦 2005 「水田跡の構造と理解」『古代文化』第57巻5号
- 秋山浩三 2007 「第四章 水田経営の進展と集落」『弥生大型農耕集落の研究』青木書店
- 廣瀬時習 2007 「弥生水田の一樣相—池島・福万寺遺跡における事例から—」『考古学に学ぶ』（Ⅲ）（同志社大学考古学シリーズⅨ・森浩一先生傘寿記念論文集）
- 安藤広道 2009 「弥生農耕の特質」『弥生時代の考古学』5・食糧の獲得と生産、同成社
- 設楽博巳 2009 「総論」『弥生時代の考古学』5・食糧の獲得と生産、同成社
- 井上智博 2011 「土地環境の変化」『弥生時代の考古学』3・多様化する弥生文化、同成社
- 江浦 洋 2012 「水田と畠の耕作」『古墳時代の考古学』5・時代を支えた生産と技術、同成社
- 若狭 徹 2012 「耕地開発と集団関係の再編」『古墳時代の考古学』7・内外の交流と時代の潮流、同成社
- 大庭重信 2013 「近畿地方における弥生時代の水利関係と水田構成の変遷」『待兼山論争』第47号史学篇
- 佐藤洋一郎 2013 「水田の景観2000年の変遷史」『日本史研究』第607号
- 江浦 洋 2014 「古墳出現期の農業基盤—水田造成技術の変革と畠の出現と展開—」『弥生文化博物館研究報告』第7集
- 大庭重信 2014 「河内平野南部の弥生時代集落景観と土地利用」『日本考古学』第38号
- 廣瀬時習 2015 「弥生時代の農業生産力を考える」『弥生研究の交差点』（みずほ別冊2）



- | | | | |
|--------------------------|---------|------------|----------|
| 1. 京都大学構内（吉田二本松町・北白川迫分町） | 3. 萩之本 | 4. 玉手 | 5. 秋津・中西 |
| 6. 安満 | 7. 高宮八丁 | 8. 讃良郡条里 | 9. 四ツ池 |
| 10. 鈴の宮 | 11. 鬼塚 | 12. 池島・福万寺 | 13. 若江北 |
| 14. 山賀 | 15. 友井東 | 16. 美園 | 17. 弓削ノ庄 |
| 18. 志紀 | 19. 木ノ本 | 20. 八尾南 | 21. 長原 |
| 22. 太田黒田 | 23. 岩屋 | 24. 口酒井 | 25. 上ノ島 |
| 26. 前田 | 27. 本庄町 | 28. 大開・上沢 | 29. 戎町 |
| 30. 玉津田中 | 31. 美乃利 | 32. 岸 | 33. 今宿丁田 |
| 34. 対中 | 35. 下加茂 | 36. 雨流 | 37. 三谷 |
| 38. 庄・蔵本 | 39. 蔵ヶ崎 | 40. 桑飼下 | 41. 丸山河床 |
| 42. 針江浜 | 43. 烏丸崎 | 44. 小津浜 | 45. 霊仙寺 |
| 46. 服部 | 47. 木部 | 48. 上出A | 49. 稲里 |
| 50. 川崎 | 51. 納所 | 52. 筋違 | 53. 高蔵 |
| 54. 西志賀 | 55. 三ツ井 | 56. 馬見塚 | 57. 池内 |